
大垣市のイメージと地域活動への参加に関する考察

－大垣市の高校生を調査対象として－

仁科信春 / 後藤康文 / 高橋利行

1. 調査の目的と概要
2. 分析の視点
3. 大垣市のまちに関するイメージ
4. 大垣市に対する満足度や住みやすさ
5. 福祉に関するイメージ
6. 福祉活動、お年寄りや障害者等との関わり
7. おわりに

1. 調査の目的と概要

1.1 調査の目的

大垣市内の高校生を対象として、大垣市というまちのイメージ、福祉に関する意識、地域活動への参加に関する意識を質問紙調査によって把握する。これを踏まえ、今後のまちづくり、および大学としての学校や地域社会への貢献・連携のあり方について考える基礎的資料とする。

なお、本調査は、2018 年度岐阜経済大学共同研究『青年期前期における地域社会に関する意識と地域活動への主体的参加に関する考察』におけるデータ収集として実施したものである。

1.2 調査の手続きと概要

平成30年5月、大垣市内の4つの高等学校に対して、質問紙調査(無記名回答)の協力を依頼した。6月から7月にかけて、質問紙の配布および回収を行った。その手続きは、当該高等学校の先生方から生徒のみなさんに質問紙をお渡しいただき、回答後、先生方より質問紙の回収をお願いするものである。

質問紙の回収数は880、有効回収数は820である。調査の概要を表1に示す。調査項目は、大垣市のまちのイメージ(まちの全体、自然、にぎわい、住宅地、公共交通、公共施設、福祉)、大垣市の総合的満足度、まちの住みやすさ、Uターン志向、まちづくり活動、福祉活動体験の意義、お年寄りや障害者の認知や関わり、福祉活動への関わり、福祉関係業界への志向、およびフェイスシート(回答者の性別、学年、現居住地)などである。

表1 調査の概要

調査期間	調査対象	回収数	有効回収数	有効回収率
平成30年 6月～7月	大垣市内 高校生	880	820	93.2%

2. 分析の視点

本稿は、大垣市のまちに関する項目と福祉に関する項目の2つの視点から分析を試みている。具体的には、①大垣市のまちに関するイメージ、および大垣市の満足度や住みやすさなどについての分析、②大垣市の福祉に関するイメージ、および福祉活動等に関する分析である。

いずれも、調査回答者の現居住地を大垣市内と市外に類型し、上述した2視点について現居住地の相違による考察を進めた。

3. 大垣市のまちに関するイメージ

大垣市のイメージを、「A:まち全体について」「B:自然について」「C:まちのにぎわいについて」「D:住宅地について」「E:公共交通について」「F:公共施設について」の6分野からみることとする。

これらへの回答選択肢は、「1. そう思う」「2. どちらかといえばそう思う」「3. どちらかといえばそう思わない」「4. そう思わない」の4件法とした。この数値(1～4)を用いて平均値を算出した。なお、項目A6,A7,A9,A11,A12, C1～C4, D1～D10, およびE1～E5までの24項目(項目番号を網掛け表示)は、反転項目である。

また、大垣市内在住者と大垣市外在住者の平均値の差において、統計的な有意差が認められた項目について、その平均値を網掛け表示した。

3.1 まち全体について

まち全体についての設問は、A1～A16までの16項目である。それぞれについて、調査回答者の現居住地(大垣市内、市外)別に平均値を示したものが表2である。前述したとおり、A6, A7, A9, A11, A12の5項目が反転項目である。

16項目のうち13項目において、大垣市内に在住する回答者は、大垣市外在住の回答者よりも、大垣というまちについて肯定的な評価をしているといえる。平均値の値から、まち全体についてのイメージは、概ね「2. どちらかといえばそう思う」という範疇にあるといえる。

13項目のうち、A1, A2, A4, A5, A9, A14, A15, A16の8項目について、大垣市内在住者は、市外在住者に比べ、大垣というまちのイメージ評価が統計的に有意に高いといえる。このことは、

回答者の現居住地（大垣市内、市外）の違いがこれら8項目のイメージに影響を与えているものと推察される。

残りの5項目（A3, A8, A10, A11, A13）は、市内在住者の平均値の値は市外在住者のそれよりも肯定的なものとなっているが、その差はごく小さく、有意差は認められていない。現居住地が市内であるか市外であるかは、これら5項目へのイメージに影響していない。このことは、平均値の値に差があったとしても、それをもって、とりたててイメージ評価が高いことを示すものではないといえる。

他方、市内在住者が市外在住者よりも否定的なイメージをもっているものは、A6, A7, A12の3項目である。特に、項目A7とA12は有意な差が認められる。他方、項目A6の平均値の値は、その差を統計的に認めることはできない。前者の2項目へのイメージは現居住地の影響が考えられ、後者にはその影響があるとはいえない。

表2 まち全体に関するイメージ

A まち全体について		全体	大垣市内	大垣市外
A1	治安がよい	2.02	1.85	2.14
A2	子どもの遊ぶ場所が十分にある	2.15	2.05	2.22
A3	街並みが美しい	2.19	2.15	2.22
A4	公園が多い	2.17	2.03	2.26
A5	駐車場は十分足りている	2.06	1.97	2.13
A6	遊歩道が少ない	2.36	2.32	2.38
A7	建物の老朽化が進んでいる	2.10	1.97	2.20
A8	景観がよい	2.34	2.34	2.35
A9	自動車の交通量が多い	1.88	2.01	1.78
A10	歴史のある建造物が多い	2.39	2.36	2.41
A11	川遊びのできる小川や水路がない	2.12	2.13	2.11
A12	電柱や電線の地中化が進んでいない	2.15	2.08	2.20
A13	歴史がある	2.13	2.07	2.17
A14	伝統がある	2.11	2.04	2.16
A15	ストレスが少ない	2.25	2.16	2.32
A16	付き合いやすい人間関係がある	2.15	2.03	2.24

3.2 自然について

大垣市の「空気」「水」「緑」といった自然に関するイメージについて示したものが表3である。5項目のすべてにおいて、大垣市内在住者のイメージは、大垣市外在住者のそれよりも肯定的な回答傾向が大きく、統計的有意差が認められる。回答者の自然に関するイメージは、回答者の現居住地に影響を受けているものと思われる。

大垣市内在住者の平均値の値は、概ね1.5～1.8程度にあり、「1. そう思う」と「2. どちらかといえばそう思う」のほぼ中間あたりに位置している。また、大垣市外在住者のそれは、「2. どちらかといえばそう思う」よりもやや「3. どちらかといえばそう思わない」にシフトしている。

市内在住者は、幼少期の頃より大垣市の自然に関する話を聞いていたり、学習をしていると思われる。大垣市は自然環境に恵まれている、水がきれい、といったことなどである。そのことがこのイメージ評価につながったものと思われる。

同様に、市外在住者においても自身の生まれ育ったまちの自然のことについて学んでいるはずである。市外といっても大垣市の近隣であろうし、それはまた、自然に恵まれた地域も多いはずである。自身の住むまちの自然と大垣市のそれとを比較し、大垣市よりも自然環境に恵まれ、水もよりきれいである、という意識があると思われる。このことで、「3. どちらかといえばそう思わない」という回答にシフトしていることは、極めて合理的な回答であるといえる。

表 3 自然に関するイメージ

B 自然について		全体	大垣市内	大垣市外
B1	自然を身近に感じる	2.10	1.88	2.26
B2	空気がきれい	2.09	1.86	2.27
B3	湧水が多い	1.86	1.54	2.10
B4	緑が多い	1.98	1.75	2.16
B5	水がきれい	1.75	1.47	1.96

3.3 まちのにぎわいについて

まちのにぎわいに関するイメージについて表4に示す。4項目のすべてが反転項目である。この場合、平均値の値が低いこと、すなわち「そう思う」という評価傾向を示すことは、まちのにぎわいへのイメージが否定的であることを意味する。また、大垣市内在住者および市外在住者の両者とも、とりわけ「C3 観光客が少ない」ことについては、そのイメージ評価が低い。

すべての項目において、大垣市内在住者の評価は市外在住者のそれに比べて、平均値が低く、統計的に有意な差となっている。すなわち、大垣市内と市外という回答者の現居住地は、にぎわいに関するイメージに影響を与えていると推察される。

表 4 にぎわいに関するイメージ

C まちのにぎわいについて		全体	大垣市内	大垣市外
C1	商店の空き店舗が多い	1.91	1.74	2.03
C2	平日の人出が少ない	2.13	1.92	2.29
C3	観光客が少ない	1.75	1.57	1.87
C4	商店は夜の早い時間に閉店する	2.05	1.91	2.15

大垣市内在住者は、商店がシャッターで閉められていたり、平日に買い物客が少ないことなどを、幼少期より日常的に目視していることが、このイメージにつながったものと考えられる。

他方、市外在住者については、前項でも記したように、大垣市の近隣自治体居住者が多いと思われる。大垣市を含むこれらの地域において、大垣市は最も都市規模の大きなまちであろう。市

外在住者にとって、大垣というまちは大きなまちであり、自身が居住しているまちと比較すれば、にぎわいのあるまち、として認知されたものと思われる。

3.4 住宅地について

住宅地の状況（空き家、街路、歩道、公園、ごみ置き場等）に関するイメージについて表5に示す。10項目のすべてが反転項目である。

項目D1～D7までの7項目において、大垣市内在住者のイメージは、市外在住者のそれに比べて低い評価となっている。特に、D1～D3およびD7の4項目は、統計的に有意な差となっている。

とりわけ、「D2 夜道が暗い」の平均値は1.78を示し、「2. どちらかといえばそう思う」よりも「1. そう思う」にやや振れている。日常の下校時において、このことが強く認知されているものと考えられる。これ以外の3項目（D4～D6）は、平均値の値に差があってもそこからイメージ評価を断定することは難しい。

有意差の検定から、D1～D3およびD7の4項目に対するイメージは、回答者の現居住地の影響を受けており、D4～D6の3項目に対するそれは、現居住地の影響はないものと推察される。

また、D8～D10の3項目は、市内在住者は市外在住者よりもイメージ評価が高いといえるが、有意差が認められるものは、「D10 ごみ置き場が通行の妨げになっている」のみである。この項目の平均値は、市内3.03、市外2.91を示し、「3. どちらかといえばそう思わない」というイメージにあるといえる。言い換えれば、調査回答者において、市内在住または市外在住のいずれにおいても、ごみ置き場が通行の妨げになっている、という認知はなされていないといえる。

表5 住宅地に関するイメージ

D 住宅地について		全体	大垣市内	大垣市外
D1	空き家が多い	2.46	2.34	2.55
D2	夜道が暗い	1.92	1.78	2.01
D3	道幅がせまい	2.10	2.00	2.18
D4	行き止まりの道が多い	2.60	2.59	2.61
D5	歩道のない道路が多い	2.28	2.24	2.32
D6	歩道にガードレールがない	2.20	2.16	2.23
D7	歩道がせまい	2.15	2.08	2.20
D8	児童公園が少ない	2.41	2.43	2.40
D9	ごみ置き場が景観を乱している	2.77	2.79	2.76
D10	ごみ置き場が通行の妨げになっている	2.96	3.03	2.91

3.5 公共交通について

公共交通（バス、タクシー、電車）に関するイメージについて表6に示す。5項目のすべてが反転項目である。

項目E1、E3、E4（バスの運行本数、停留所のスペースおよびタクシー台数）について、大垣

市内在住者の平均値の値は、市外在住者のそれに比較してやや低くなっている。しかしながら、その差はごく小さく、統計的な有意差は認められない。両者において、イメージの差はほぼないといってよい。すなわち、これら3項目に対するイメージは大垣市内および市外という回答者の現居住地の影響を受けていないものと思われる。

項目 E5(電車の本数)の平均値をみると、市内在住者2.22, 市外在住者1.98を示す。市内在住者は、「2. どちらかといえばそう思う」よりも「3. どちらかといえばそう思わない」の傾向に少し振れている。他方、市外在住者は、ほぼ「2. どちらかといえばそう思う」というイメージである。

このことから、大垣市内在住者は市外在住者よりも、電車の本数が少ないとは思わない、というイメージが有意に高いといえる。これに対し、市外在住者は市内在住者よりも、通学において電車の利用度が高いと思われる。運行本数の少ないことが日常的な体験のもとに認知されていることが、このようなイメージの差に表れたものと推察される。

表 6 公共交通に関するイメージ

E 公共交通について		全体	大垣市内	大垣市外
E1	バスの本数が少ない	2.06	2.03	2.08
E2	バス停が少ない	2.31	2.31	2.31
E3	バス停のスペースがせまい	2.38	2.31	2.43
E4	タクシーの台数が少ない	2.57	2.55	2.59
E5	電車の本数が少ない	2.08	2.22	1.98

3.6 公共施設について

公共施設（文化、医療・福祉、教育、娯楽、商業・購買、防災・保安、保健・衛生、公共交通）に関するイメージについて表7に示す。

大垣市内在住者の平均値は1.8～2.4程度の範囲にあり、イメージは、概ね「2. どちらかといえばそう思う」の前後にあるといえる。他方、市外在住者については、平均値は2～2.3程度を示し、「2. どちらかといえばそう思う」よりもやや「3. どちらかといえばそう思わない」の傾向にシフトしている。

大垣市内在住者が市外在住者よりもイメージ評価が高いものは、F1, F2, F3, F6, F7, F8の6項目である。このうち、統計的な有意差が認められたものはF2, F3, F7, F8の4項目である。これら4項目に対するイメージは、回答者の現居住地の影響が考えられる。

F1 および F6 の2項目は、平均値の値は肯定的傾向を示している。しかし、有意差は認められておらず、現居住地の違いがイメージの差に表れていると考えることは難しい。すなわち、大垣市内在住と市外在住の差はないと考えられる。

他方、項目 F4 および F5 は、市外在住者のほうが平均値は低く、市内在住者よりも肯定的評価となっているが、統計的な有意差はない。この2項目は、市内と市外という居住地によるイメージの差は認められない。

最も否定的なイメージを持っているものは、市内在住者と市外在住者のいずれも「F4 娯楽施設が整っている」の項目である。他の7項目に比べ、「そう思わない」への傾向が強い。すなわち、調査回答者にとって、現居住地にかかわらず、大垣というまちの娯楽施設に対するイメージ評価が低いことを示すものである。

表7 公共施設に関するイメージ

F 公共施設について		全体	大垣市内	大垣市外
F1	文化施設が整っている	2.15	2.11	2.18
F2	医療・福祉施設が整っている	1.90	1.80	1.98
F3	教育施設が整っている	1.94	1.86	2.00
F4	娯楽施設が整っている	2.34	2.39	2.31
F5	商業・購買施設が整っている	2.16	2.16	2.15
F6	防災・保安施設が整っている	2.09	2.05	2.12
F7	保健・衛生施設が整っている	2.03	1.97	2.09
F8	公共交通施設が整っている	2.07	2.01	2.12

4. 大垣市に対する満足度や住みやすさ

ここでは、大垣市というまちに対する総合的な満足度、住みやすさに対する意識、愛着感、Uターン志向、まちづくり活動に対する興味、およびまちづくり活動への参加志向について、4件法で回答を求め、構成比を算出した。これらについて、大垣市内在住者と市外在住者の意識の相違について分析を行う。

4.1 総合的満足度

大垣市というまちを総合的にみて、どの程度の満足度があるのかを調べたものが表8である。大垣市内在住者は、「とても満足している」と「ある程度満足している」の合計が、ほぼ9割を占めている。他方、大垣市外在住者のそれは8割程度である。

両者ともに、大垣市というまちへの総合的な満足度は高いといえるが、大垣市内在住者のほうが市外在住者よりもやや満足度が高い傾向にある。また、統計的有意差が認められている。この差は、大垣市内在住者の「とても満足している：18.9%」への回答と、市外在住者の「あまり満足していない：16.2%」への回答の差によるものと考えられる。

表8 現在の居住地と総合的満足度

	とても満足している	ある程度満足している	あまり満足していない	まったく満足していない	計
大垣市内	18.9%	70.3%	9.6%	1.2%	100%
大垣市外	8.1%	73.3%	16.2%	2.3%	100%
計	12.7%	72.1%	13.4%	1.8%	100%

4.2 住みやすさ

大垣市というまちが住みやすいまちであるかについて、大垣市内在住者と市外在住者の相違を表9に示す。市内在住者の回答は、「とても住みやすいと思う:27.9%」「ある程度住みやすいと思う:66.6%」である。全体の95%程度が「住みやすい」という意識をもっている。市外在住者についても80%余りが「住みやすい」という回答である。前項の総合的満足度と同様に、市内在住者と市外在住者の両者とも、大垣市というまちへの住みやすさ意識が高いといえる。

しかしながら、「とても住みやすいと思う」という意識は、大垣市内在住者（27.9%）のほうが市外在住者（10.4%）よりも高く、「あまり住みやすいとは思わない」という意識は、大垣市外在住者（14.9%）のほうが市内在住者（4.4%）のそれよりも高い。これは有意差が認められており、現居住地が意識の差に影響を与えていると推察される。

表9 現在の居住地と住みやすさ

	とても住みやすいと思う	ある程度住みやすいと思う	あまり住みやすいとは思わない	まったく住みやすいとは思わない	計
大垣市内	27.9%	66.6%	4.4%	1.2%	100%
大垣市外	10.4%	71.5%	14.9%	3.2%	100%
計	17.8%	69.4%	10.4%	2.3%	100%

4.3 愛着感

表10に、大垣市内在住者と市外在住者の大垣市への愛着感について示す。市内在住者は、「とても愛着を感じる:25.6%」「ある程度愛着を感じる:54.1%」を示し、概ね8割程度が大垣市への愛着感を有している。

他方、市外在住者においては、「とても愛着を感じる」は5.9%であり、「ある程度愛着を感じる」と「あまり愛着を感じない」がいずれも4割程度を示している。市外在住者の大垣市というまちへの愛着感の有無は、ほぼ2分されているといえる。

大垣市内在住者と市外在住者の大垣市への愛着感には、統計的有意差が認められ、現居住地の差が影響しているものと思われる。

表10 現在の居住地と愛着感

	とても愛着を感じる	ある程度愛着を感じる	あまり愛着を感じない	まったく愛着を感じない	計
大垣市内	25.6%	54.1%	18.0%	2.3%	100%
大垣市外	5.9%	40.3%	40.1%	13.6%	100%
計	14.2%	46.1%	30.8%	8.8%	100%

4.4 Uターン志向

進学または就職で現在の居住地を離れた場合、将来、大垣市に戻って住みたいという意識(Uターン志向)について表11に示す。

大垣市内在住者は、「戻りたいと思う」がほぼ2割であり、これと「どちらかといえば戻りたいと思う」を合わせて65%程度である。「どちらかといえば戻りたいとは思わない」への回答も25%程度を示している。

大垣市外在住者については、「戻りたいと思う」は6.0%に過ぎず、「戻りたいとは思わない」が26.2%を示す。「どちらかといえば戻りたいと思う」と「どちらかといえば戻りたいとは思わない」への回答は34%前後であり、概ね6割が「戻りたいとは思わない」という傾向を示している。

統計的有意差が認められ、両者の意識の差には現居住地の差が影響しているものと考えられる。

表11 現在の居住地とUターン志向

	戻りたいと思う	どちらかといえば戻りたいと思う	どちらかといえば戻りたいとは思わない	戻りたいとは思わない	計
大垣市内	19.0%	45.5%	24.5%	11.1%	100%
大垣市外	6.0%	33.0%	34.8%	26.2%	100%
計	11.5%	38.3%	30.4%	19.8%	100%

4.5 まちづくり活動に対する興味

住みやすいまちをつくるための活動への興味について調べたものが表12である。大垣市内在住者は、「興味がある」と「ある程度興味がある」の合計が46%程度である。まちづくり活動への興味の有無は、ほぼ2分されている。

表12 現在の居住地とまちづくり活動への興味

	興味がある	ある程度興味がある	あまり興味はない	興味はない	計
大垣市内	10.5%	35.6%	38.5%	15.5%	100%
大垣市外	8.5%	29.3%	43.3%	18.9%	100%
計	9.3%	31.9%	41.3%	17.4%	100%

市外在住者については、「あまり興味はない」と「興味はない」を合わせて約62%を占め、興味がないことへの傾向が過半数を超えている。

大垣市内在住者の回答と市外在住者の回答に、統計的有意差は認められていない。したがって、現居住地の違いは、まちづくり活動への興味や関心に影響を与えていないと考えられる。

4.6 まちづくり活動への参加志向

住みやすいまちをつくるための活動への参加志向について表 13 に示す。大垣市内在住者は、「参加したいと思う」と「少しは参加したいと思う」の合計が 45% 程度であり、前項のまちづくり活動への興味の有無と同様に、活動への参加志向はほぼ 2 分されている。

市外在住者については、「参加したいと思う」と「少しは参加したいと思う」を合わせて 4 割程度であり、活動への参加志向は消極的意識が高くなっている。

前項のまちづくり活動への興味と同様に、居住地の差とまちづくり活動への参加志向とは有意差が認められておらず、現居住地の違いが参加志向意識に影響を与えていないものと思われる。

表 13 現在の居住地とまちづくり活動への参加志向

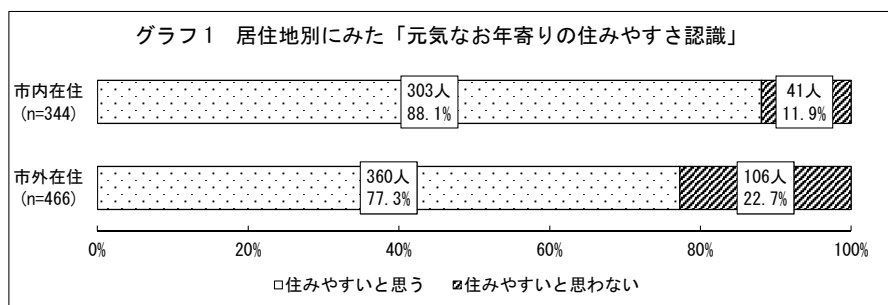
	参加したいと思う	少しは参加したいと思う	あまり参加したいとは思わない	参加したいとは思わない	計
大垣市内	6.7%	38.4%	39.0%	16.0%	100%
大垣市外	5.3%	34.6%	40.8%	19.3%	100%
計	5.9%	36.2%	40.0%	17.9%	100%

5. 福祉に関するイメージ

ここでは、大垣市というまちの福祉に関するイメージを、居住地の違いという視点から考えるものとする。回答者の居住地において、岐阜県外居住者および欠損値を集計から除外した。

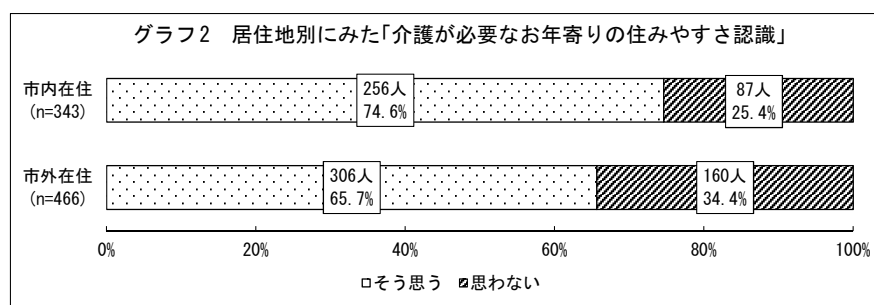
5.1 居住地の違いと「元気高齢者の住みやすさ認識」

市内在住の高校生のうち、「元気な高齢者が住みやすい」地域と認識しているのは 303 人 (88.1%)、そのように認識しない者は 41 人 (11.9%) である。市外在住の高校生は、それぞれ 360 人 (77.3%)、106 人 (22.7%) である。「元気なお年寄り」にとって大垣市を住みやすい地域と認識する割合の差は 10.8 ポイントで、約 1.14 倍の比率差で市内在住高校生は「元気高齢者が住みやすい」地域と認識している (グラフ 1)。



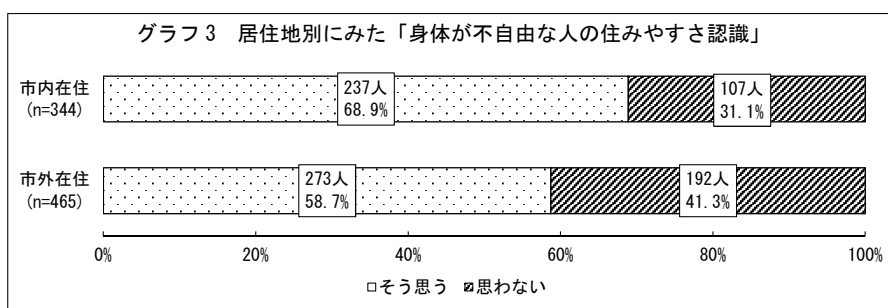
5.2 居住地の違いと「要介護高齢者の住みやすさ認識」

市内在住の高校生のうち、「介護が必要な高齢者が住みやすい」地域と認識しているのは256人(74.6%)、そのように認識しない者は87人(25.4%)である。市外在住の高校生は、それぞれ306人(65.7%)、160人(34.4%)である。「介護が必要なお年寄り」にとって大垣市を住みやすい地域と認識する割合の差は8.9ポイントで、約1.14倍の比率差で市内在住高校生は「要介護高齢者が住みやすい」地域」と認識している(グラフ2)。



5.3 居住地の違いと「身体障害者の住みやすさ認識」

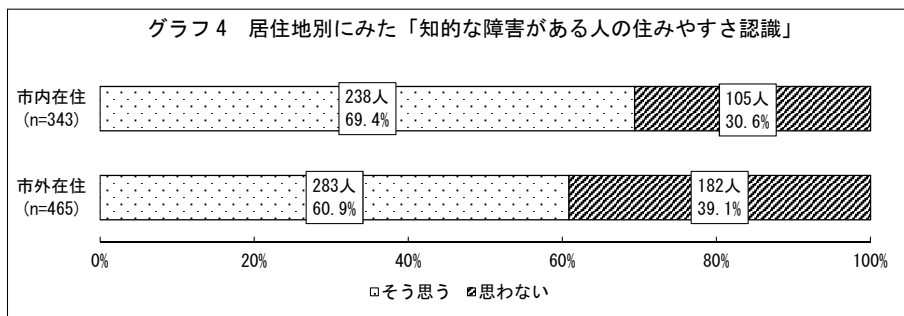
市内在住の高校生のうち、「身体が不自由な人が住みやすい」地域と認識しているのは237人(68.9%)、そのように認識しない者は107人(31.1%)である。市外在住の高校生は、それぞれ273人(58.7%)、192人(41.3%)である。「身体障害者」にとって大垣市を住みやすい地域と認識する割合の差は10.2ポイントで、約1.17倍の比率差で市内在住高校生は「身体障害者が住みやすい」地域」と認識している(グラフ3)。



5.4 居住地の違いと「知的障害者の住みやすさ認識」

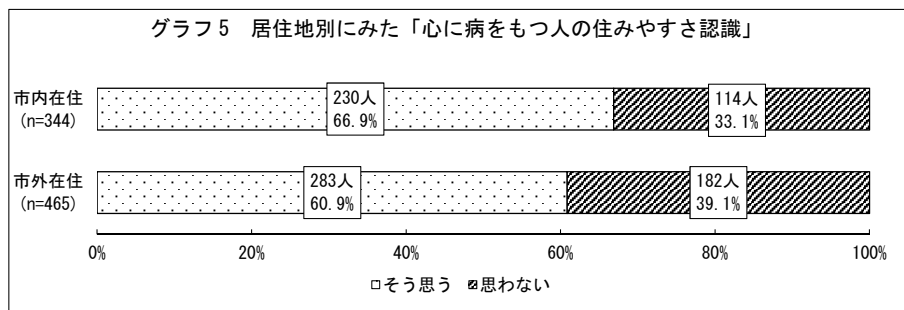
市内在住の高校生のうち、「知的な障害をもつ人が住みやすい」地域と認識しているのは238人(69.4%)、そのように認識しない者は105人(30.6%)である。市外在住の高校生は、それぞれ283人(60.9%)、182人(39.1%)である。「身体障害者」にとって大垣市を住みやすい地域と認

識する割合の差は 8.5 ポイントで、約 1.14 倍の比率差で市内在住高校生は「知的障害者が住みやすい」地域と認識している（グラフ 4）。



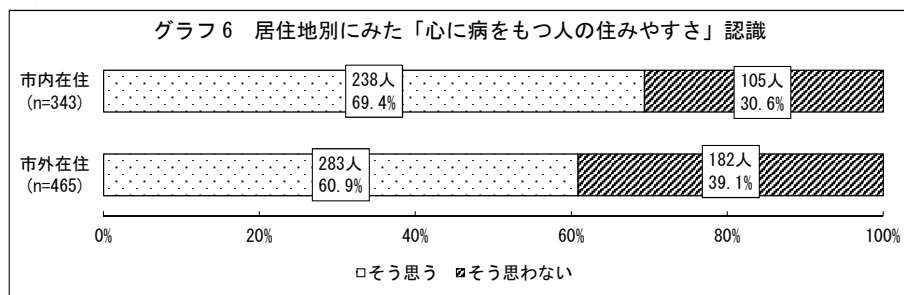
5.5 居住地の違いと「精神障害者の住みやすさ認識」

市内在住の高校生のうち、「心に病いをもつ人が住みやすい」地域と認識しているのは 230 人 (66.9%)、そのように認識しない者は 114 人 (33.1%) である。市外在住の高校生は、それぞれ 283 人 (60.9%)、182 人 (39.1%) である。「精神障害者」にとって大垣市を住みやすい地域と認識する割合の差は 6.0 ポイントで、約 1.10 倍の比率差で市内在住高校生は「精神障害者が住みやすい」地域と認識している（グラフ 5）。



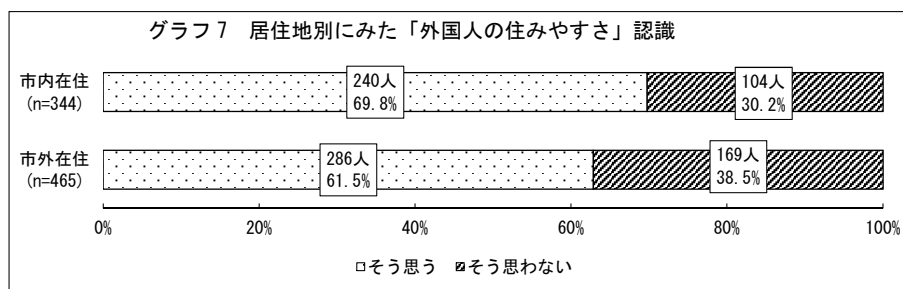
5.6 居住地の違いと「子育てのしやすさ」に関する認識

市内在住の高校生のうち、「子育てしやすい」地域と認識しているのは 238 人 (69.4%)、そのように認識しないのは 105 人 (30.6%) である。市外在住の高校生は、それぞれ 283 人 (60.9%)、182 人 (39.1%) である。大垣市を「子育てしやすい」地域と認識している割合の差は 8.5 ポイントで、約 1.14 倍の比率差で市内在住高校生は「子育てしやすい」地域と認識している（グラフ 6）。



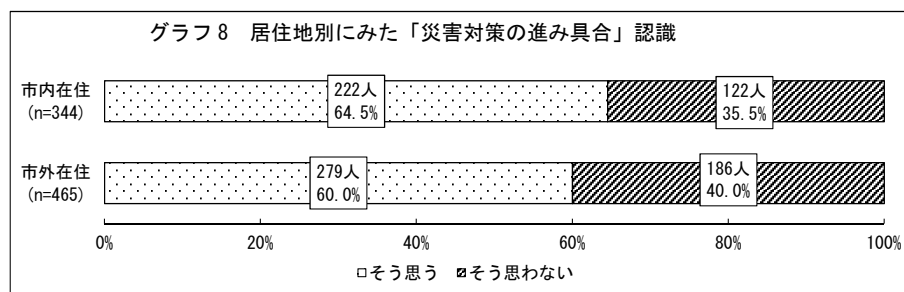
5.7 居住地の違いと「外国人の住みやすさ」に関する認識

市内在住の高校生のうち、「外国人が住みやすい」地域と認識しているのは240人(69.8%)、そのように認識しないのは104人(30.2%)である。市外在住の高校生は、それぞれ286人(61.5%)、169人(38.5%)である。大垣市を「外国人が住みやすい」地域と認識している割合の差は8.3ポイントで、約1.13倍の比率差で市内在住高校生は「外国人が住みやすい」地域と認識している(グラフ7)。



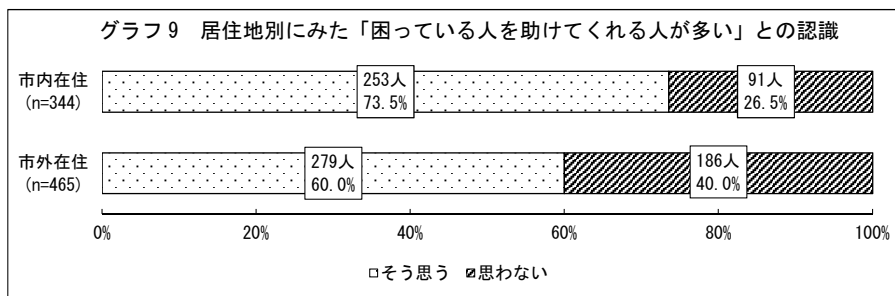
5.8 居住地の違いと「災害対策の進み具合」に関する認識

市内在住の高校生のうち、「災害対策が進んでいる」と認識しているのは222人(64.5%)、そのように認識しないのは122人(35.5%)である。市外在住の高校生は、それぞれ279人(60.0%)、186人(40.0%)である。大垣市を「災害対策が進んでいる」地域と認識している割合の差は4.5ポイントであり、市内在住高校生のほうがわずかに高い(グラフ8)。



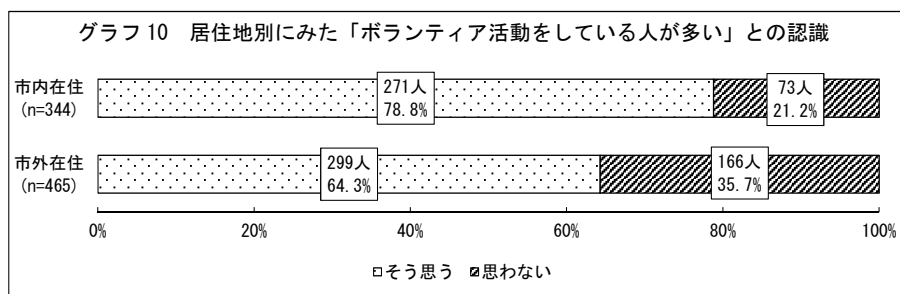
5.9 居住地の違いと「困っている人を助けてくれる人の多さ」に関する認識

市内在住の高校生のうち、「困っている人を助けてくれる人」が多いと認識しているのは253人(73.5%)、そのように認識していないのは91人(26.5%)である。市外在住の高校生は、それぞれ279人(60.0%)、186人(40.0%)である。大垣市を「困っている人を助けてくれる人が多い」地域とする認識の割合の差は13.5ポイントであり、市内在住高校生のほうが高い(グラフ9)。



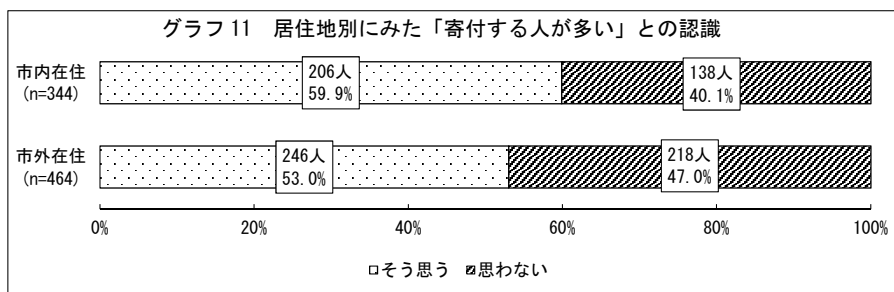
5.10 居住地の違いと「ボランティア活動者の多さ」に関する認識

市内在住の高校生のうち、「ボランティア活動している人」が多いと認識しているのは271人(78.8%)、そのように認識していないのは73人(21.2%)である。市外在住の高校生は、それぞれ299人(64.3%)、166人(35.7%)である。大垣市を「ボランティア活動している人が多い」地域と認識している割合の差は14.5ポイントであり、市内在住高校生のほうが高い(グラフ10)。



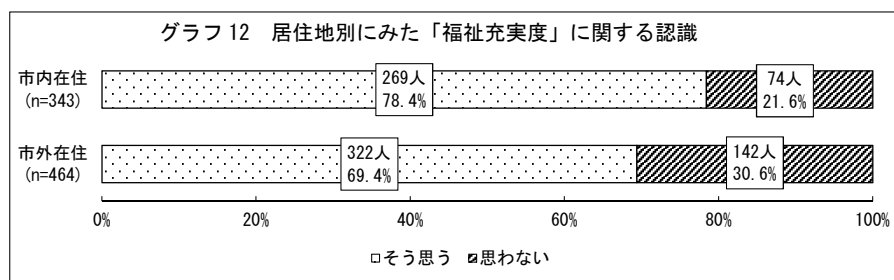
5.11 居住地の違いと「寄附する人の多さ」に関する認識

市内在住の高校生のうち、「寄附する人」が多いと認識しているのは206人(59.9%)、そのように認識していないのは138人(40.1%)である。市外在住の高校生は、それぞれ246人(53.0%)、218人(47.0%)である。大垣市を「寄附する人が多い」地域と認識している割合の差は6.9ポイントであり、市内在住高校生のほうがわずかに高い(グラフ11)。



5.12 居住地の違いと「福祉の充実度」に関する認識

市内在住の高校生のうち、「福祉が充実している」地域と認識しているのは269人(78.4%)、そのように認識していないのは74人(21.6%)である。市外在住の高校生は、それぞれ322人(69.4%)、142人(30.6%)である。大垣市を「福祉が充実している」地域と認識している割合の差は9.0ポイントであり、市内在住高校生のほうがわずかに高い(グラフ12)。

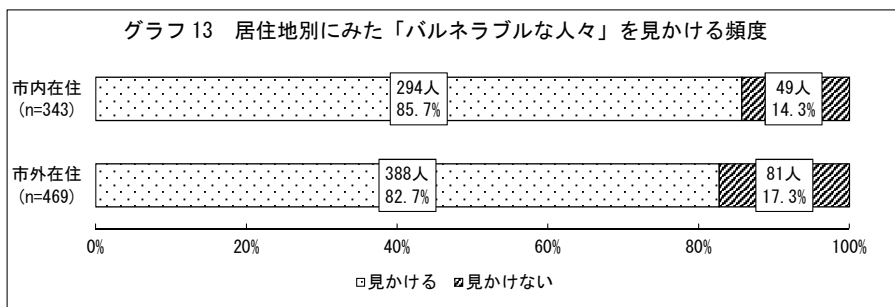


6. 福祉活動、お年寄りや障害者等との関わり

ここでは、福祉活動への関わり、お年寄りや障害者の認知や関わり等について、居住地の違いから考える。回答者の居住地において、岐阜県外居住者および欠損値を集計から除外した。

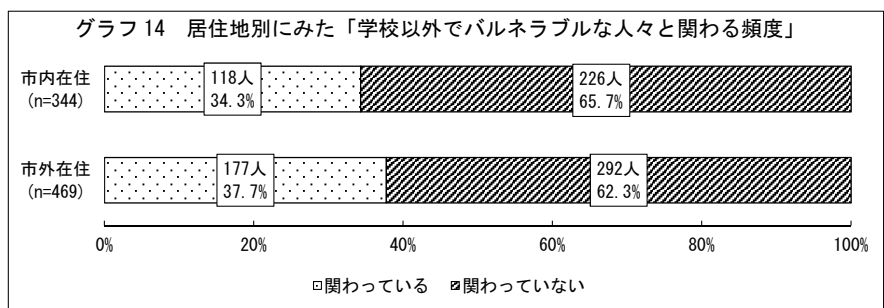
6.1 居住地の違いと「学校以外でバルネラブルな人々を見かける頻度」

市内在住の高校生のうち、「学校以外でお年寄りや障害者を見かける」としているのは294人(78.8%)、そうでないとしているのは73人(14.3%)である。市外在住の高校生は、それぞれ388人(82.7%)、81人(17.3%)である。学校以外でバルネラブルな人々を見かける頻度に関する割合の差は3.0ポイントであり、市内在住の高校生のほうがわずかに高い(グラフ13)。



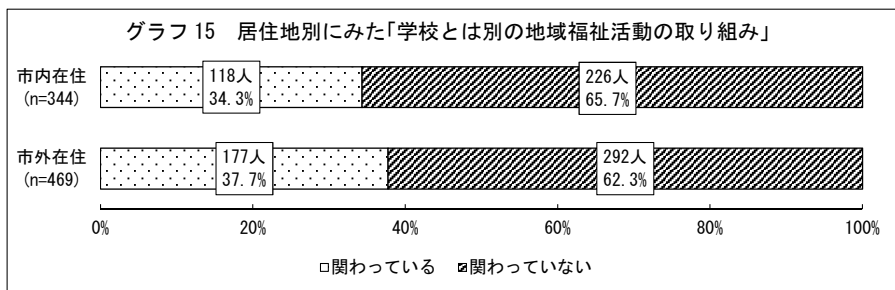
6.2 居住地の違いと「学校以外でバルネラブルな人々と関わる頻度」

市内在住の高校生のうち、「学校以外でお年寄りや障害者に関わった」としているのは118人(34.3%)、関わっていないとするのは226人(65.7%)である。市外在住の高校生は、それぞれ177人(37.7%)、292人(62.3%)である。「学校以外でバルネラブルな人々と関わる頻度」の割合の差は3.4ポイントであり、居住地の差異による大差はみられない(約0.91倍)(グラフ14)。



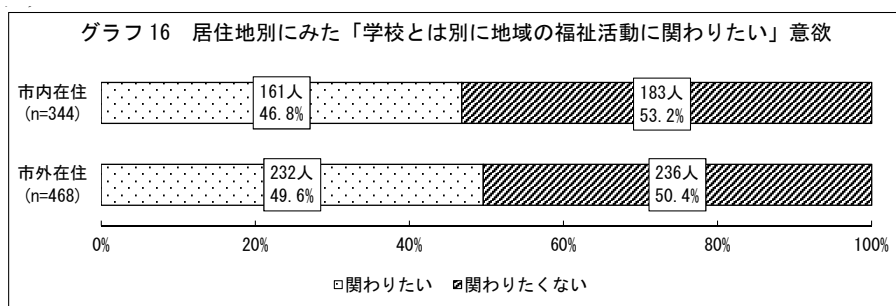
6.3 居住地の違いと「学校とは別の地域の福祉活動の取り組み」

市内在住の高校生のうち、「学校とは別に地域の福祉活動に関わった」としているのは118人(34.3%)、関わっていないのは226人(65.7%)である。市外在住の高校生は、それぞれ177人(37.7%)、292人(62.3%)である。「学校とは別に地域の福祉活動に関わった」とする割合は、居住地の差異による大差はない(約1対1.10)(グラフ15)。なお、度数および割合は、上記6.2と同じ結果であった。



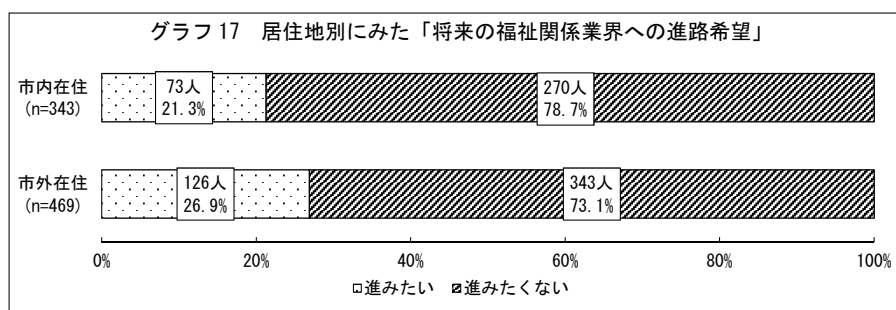
6.4 居住地の違いと「学校とは別の地域の福祉活動に関わる意欲」

市内在住の高校生のうち、「学校とは別に地域の福祉活動に関わりたい」としているのは161人(46.8%)、そのように認識しない者は183人(53.2%)である。市外在住の高校生は、それぞれ232人(49.6%)、236人(50.4%)である。「学校とは別に地域の福祉活動に関わりたい」とする意欲の割合は、居住地の差異による大差はない(約1対1.06)(グラフ16)。



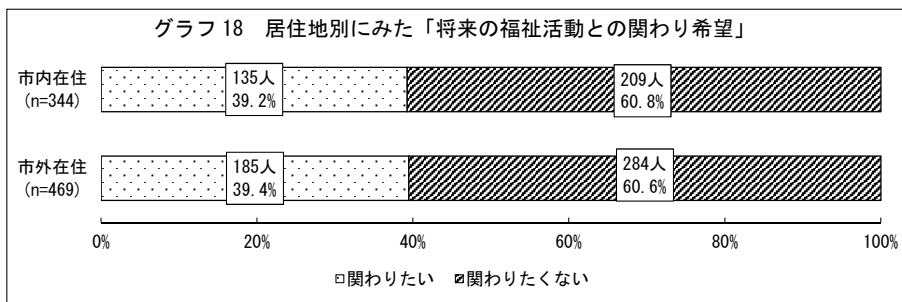
6.5 居住地の違いと「将来の福祉関係業界への進路希望」

市内在住の高校生のうち、「将来、福祉関係の業界に進みたい」としているのは73人(21.3%)、進みたくないとしているのは270人(78.7%)である。市外在住の高校生は、それぞれ126人(26.9%)、343人(73.1%)である。「将来、福祉関係り業界に進路希望」をもつ者の割合は、居住地の差異による大差はない(約1対1.26)(グラフ17)。



6.6 居住地の違いと「将来の福祉活動との関わり希望」

市内在住の高校生のうち、「将来、福祉活動に関わりたい」としているのは135人(39.2%)、関わりたくないとしているのは209(60.8%)である。市外在住の高校生は、それぞれ185人(39.4%)、284人(60.6%)である。「将来、福祉活動に関わりたい」とする者の割合は、居住地の差異による大差はない(約1対0.99)(グラフ18)。



7. おわりに

本稿で示したことは、現時点での報告としてまとめたものである。得られたデータの分析や解析は十分ではなく、今後もより詳細な分析が進められていくことになる。とりわけ、高校生（調査対象者）が、自身の生活するまちについて、どのように認知しているのかを明らかにするとともに、そのことと、自身と地域社会との関わりについて考察することが必要である。現状を正しく認識することが地域の諸問題の発見につながり、高校生と多様な地域主体との問題解決に向けた関わりが重要だからである。

また、高校生の意識と行動実態を明確にするためには、本調査対象以外の高校生、中学生および一般市民との差を比較する必要がある。そのためには、これらを対象とした調査計画の検討も必要であろう。

高大連携のあり方については、本学と高等学校との緊密な相互連絡と、具体的で実効性のある協議のなかで議論されていくことになろう。

また、本研究代表者のこれまでの研究を踏まえれば、本学における地域社会への貢献と連携のあり方について、これまでのやり方をそのまま継続することが最善であるとは考えにくい。現状把握と、それに基づく抜本的改革の検討が必要であろう。これについては、今後の詳細分析報告の際に、本研究代表者として問題提起を行うものとする。